

東京夏の学校の感想

感 想 5

小 川 泰（東京教育大理）

今回の様な催しの意義は認めながら、アジア財団の問題と運営面に危惧を感じて若手の署名に参加し、且つ出席致しました。講議内容自身、また各講師の人柄、態度等感銘を受け、fight にみちて帰途につくことができました。しかし上に述べた様な「危惧」に筋を通して若手の申し込み者が少なかつたせいもありましょうが、我々が描いていたイメージとは非常に違つて、若手が少く、むしろ成人教育の方が主であるという感じでした。そんなわけで我々チンピラは何か威圧感を受け、言葉の問題もありますが質問、討論会、気軽に振舞えませんでした。結局、対象についての方針がはつきりしていなかつたのか、変更せざるを得なかつたのか判りませんが、今後は、分野、内容、対象、運営、資金面等 open な討論で方針を決めるべきだと思います。private な企画があつてよいとの意見も成り立つとは思いますが、資金のこともなり、そんなにチョコチョコほうほうでこんな催しができるものではありませんから矢張り public に考えるべきだと思います。

またアジア財団の問題については、「物理学者は探索すべきでない」とのことですが、中国研究者達は、東洋学者として学術学議に貝塚茂樹、山本達郎両氏が招請するという形で「全中国研究者シンポジウム」というものを 1962 年 7 月に開きました。他の学問分野でアジア財団から援助を受けようというには、少くとも彼等が何を論じたかを検討する義務はあると思います。直接我々の活動が左右されることはなくとも、他の分野に於ける影響にまで特に学問、文化全域にまで責任をもつべきであると思います。

兎に角、こじれている若手との間を正す話し合いの機会は是非設け、今後は全研究者の納特の行く形で開くべきだと思います。

感 想 6

大 野 公 男（北大理）

私の主に興味を持つ原子・分子の問題もまさに多体問題であり、最近色々なモダンなテクニクを応用する例も出て来ているので、将来の進路への見通し

を養えるというのが、最大の効果だつたかも知れません。例えば Kohn さんの話された inhomogeneous field の中での interacting electron gasなどは正しく原子、分子そのものであり、Brueckner さんの話された He の結晶での核の運動の correlation の扱い方も電子の correlation の取扱いに直接応用できそうです。電子の海の中で相互作用する二つの電子間の力が Coulomb の法則よりどの位弱められるかを、電子密度の関数として知ることができれば、原子・分子の性質の計算に非常に役に立つということもあります。

原子・分子ということを離れれば、やはり超伝導の理論の現状を知ることができたのは幸いで、その成功ぶりは大変印象的でした。

この種の international meeting は日本で始めてということで、準備に当てられた関係者の御努力は大変なものだつたと思われます。参加者の一人として厚く御礼を申し上げます。

運営に関する問題点と云えば、やはり会議か学校かという矛盾した二つの性格をどう調和させるかということで、これは来年度以降の似た計画にも大問題の一つとして残ることでしょう。今年の meeting でも school としての性格があつたからこそ私なども参加させていただいたので、その点すこぶるユニークであり、新聞などで「二つの国際会議」として京都 Conference とならべて取上げているのは見当違いだと思います。もつともこの種の国際交流の少い我国で、全く school として徹するのは困難でしょう。その点をどう調整すべきかは各人各様の意見があると思いますが、此の種の試みは今後色々な形で段々と盛んになつていつて是非ほしいものであり、数多くなれば school の性格の濃いものがあつて良いのではないかというのが私の感想です。

感 想 7

三 輪 浩 (阪大理)

今度の summer institute の「前半の部」に参加した人のかなりの割合の人がそうであつた様に、私も conference ではなくて学校なればこそと考えて応募し、幸い出席を許された。いわば多体問題にとつては門外漢の一人であり、しかもこの計画を知つたのは例の財源や運営主体などについての論議がす